

序章

本書第2版では2013年1月から2017年6月までの世界の国際G I競走の勝馬を網羅した母系（牝系）の樹形図を掲載しました。世界のG Iは年間で約460あり、勝馬を随時加筆していくのは地道な作業であり、この第3版ではとりあえず2010年以降に開催されたG Iの勝馬を網羅し、第4版か第5版で今世紀（2001年以降）生まれの全G I馬を最終的に網羅しようと考えていたのです。しかし、中途半端なことはやめて一気に加筆しようと決意。昨年（2020年）末までのG Iに勝った今世紀生まれの全ての馬を網羅し、当初の予定を大幅に遅れてようやく発行にこぎつけました。

この樹形図に網羅したG I馬の総数は約4500で、母系の重要性に関する論述の付随資料の意味も持たせております。このことから、この第3版の副題は「偉大なる母の力」としました。

なお、初版および第2版で掲載した父系の樹形図はこの第3版では掲載しておりません。理由は、母系樹形図の頁数がかなり増えたことに加えて、後述のとおり、サラブレッドの能力の科学的探究において「父」を論ずる意義はあるものの、「父系」を論ずる意義はないと判断したからです。

私の血と汗と涙の結晶とも言うべきこの母系樹形図を最も利用して頂きたいのは、とりもなおさず生産者の方々です。生産者各位が自らの牧場に保有する繁殖牝馬をこの樹形図に加筆した場合に、その周囲にどの程度のG I馬がいるのか？ そしてどのようなタイプのG I馬がいるのか？ そのような視点からこの樹形図をじっくりと眺め、同じ枝葉系統の活躍馬の特徴を精査してみると、配合すべき種牝馬のヒントも見えてくるのではないかと思うからです。

ところで、私は自らを「B級科学者」と呼んでいます。B級どころか「科学者」と自らを呼ぶにはまだまだ知識が浅薄だと思うのですが、敢えてそのように呼ぶことにより、無理やりにも自らの意識を鼓舞しているのです。

なぜそのように鼓舞するのか？ 相変わらず、日本のみならず世界の競馬サークルにおいて科学的に疑問だらけな論説がいくつもあり、生物学を曲りなりにも勉強した者としてこれらを看過できなくなってしまい、自分なりに科学的啓発ができないものかと思ったのが始まりです。

「なぜ極度の近親交配はリスクが高いのか？」

その理由は、高校の理科（生物）をきちんと勉強していれば理解できていて当たり前かもしれませんが、残念ながら、生産界を含めたあらゆる競馬関係領域において、その科学的理由を理解している者は一握りにすぎないというのが私の率直な感想です。

「なぜ芦毛と芦毛の両親からも鹿毛や栗毛が生まれるのか？」

このような「なぜ？」がサークル全体にあまりに欠乏しています。両親ともに芦毛でも非芦毛が生まれるしくみを理解することは、遺伝の大原則である「メンデルの法則」を理解することにもなり、これを生産者が理解することは、配合の検討に応用できる知識を得たことにもなります。

他方、研究を生業とするA級科学者たちのサークル内での発言は、このような「基本」の話を常に素通りして自己満足的な難解な話に終始しているような気がしてなりません。

以上のようなことから、A級科学者と競馬サークルとの橋渡しがB級科学者たる私の使命だと思い、あらためて本書では以下について論述させていただきます。

- 第1章 母系の重要性
- 第2章 近親交配の危険性
- 第3章 科学的啓発の必要性
- 第4章 未知なる遺伝子の可能性